

「プロト工業化」から「手工業地域」へ：第8回国 際経済史会議以降の欧米学界

田北，廣道

<https://doi.org/10.15017/4494388>

出版情報：経済学研究. 62 (1/6), pp.149-169, 1996-03-01. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



「プロト工業化」から「手工業地域」へ

——第8回国際経済史会議以降の欧米学界——

田 北 廣 道

目 次

はじめに

I. 「プロト工業化」論批判の展開

(1) テーゼ派の理論概要

(2) テーゼ批判の展開

II. 「プロト工業化」から「手工業地域」へ

(1) 「プロト工業化」論継承の背景

(2) 「手工業地域」論の浮上

むすび

は じ め に

経済史学の分野において、内外を問わず、過去四半世紀間活発な論議を呼んだテーマの一つに「プロト工業化」論がある。1971年『アメリカ経済史雑誌』上でのティリー兄弟による問題提起、それに続く1972年概念の提唱者であるF. メンデルスによる理論の定式化を受けて、研究は急旋回した(Tilly 1971: Mendels 1972)。すなわち、機械制・工場制にもとづく本格的な工業化に先行し、その準備段階をなす農村の域外市場向け手工業地域を対象とし、農業・手工業・人口に跨がる構造分析が矢継ぎ早に発表された。この時期の業績ラッシュを、W. シュトロマーとL. A. クラークソンは、各々皮肉を込めて次のように表現した。「過去十数年来、経済史・社会史を通じて流行の衣服を身に纏った、『プロ

ト工業化』という妖怪が徘徊している」(Stromer 1986, 42), 「70年代初頭から『プロト工業化』という耳慣れない表現が、経済史関係の文献に登場し、またたく間に著書、研究論文あるいは卒業論文をさえ席卷してしまった」(Clarkson 1985, 9)。

そのハイライトが、1982年ブダペストで開催された第8回国際経済史会議での主要テーマへの選定で、討議用ペーパー作成のため論文投稿の呼びかけが行われると、欧米学界はもちろん、日本・アジア・アフリカの諸国から49本の論文が寄せられ、国際的な関心の高さを浮き彫りにした(Mendels 1982)。その背景には、南北問題が先鋭化するなか、欧米諸国の歴史的経験から第三世界の工業化の処方箋を探る、現代的要請があったが、研究史的にもそれは、一つの画期となった。すなわち、メンデルスの担当した概括報告は、72年概念に微修正を施して、概念の曖昧さに起因する議論のすれ違いを回避するための「国際的に権威あるヴァージョン」(Coleman 1983, 468)を提示したからに他ならない。

その間、ドイツのマックス＝プランク研究所の3人の歴史家、P. クリーテ、H. メディック、J. シュルムボームは、ネオ・マルキストの立場からメンデルス理論を『工業化前の工業化』として批判的に継承し、とりわけ「封建制から資

本主義への移行」の文脈に位置づけ独自の理論を展開した (Kriedte et al. 1977a)。このネオ・マルキスト版とも呼べるプロト工業化理論は、3人の歴史家相互の微妙な意見の食い違いにもかかわらず、メンデルス説と並び「プロト工業化」論のテーゼ派の一方の柱となったことを、付言しておきたい。

ところで、第8回国際経済史会議は、上記のように理論装置の再定式化をもたらしたのであれば、研究活性化の契機となったのか、それとも、論争収束のきっかけとなったのだろうか。1984年上記テーゼ派の業績に好意的な書評を寄せ、85、86の両年『経済と社会』誌上でF. パーリンとの間に「遅ればせのプロト論争」を闘わせた、G. エリィは、次のように述べ退潮傾向を指摘する (Eley 1984, 1986 : Perlin 1985)。「ブダペスト会議が、分水嶺に当たるように思える。魅惑的な理論の門出にしばしばつきものなことが、初期の熱狂は、あら捜し的で批判的な精緻な研究の進展に直面して後退しつつある」 (Eley 1984, 520)。また、J. クワッテルトも、「その (メンデルスとティリー兄弟による問題提起) 後、少なくとも10年間プロト工業化は、経済社会史研究にあって最も刺激的で将来性豊かなテーマの一つとなった」 (Quataert 1988, 4) と、およそ80年代初頭を境とした沈静化を想定する¹⁾。

しかし、このような見方は、いささか早計に過ぎると言わざるをえない。例えば、オスマン

トルコ帝国領内の東部テッサリア地方を対象とした S. D. ペトメザスの90年論文や、1860-1950年イタリアのロンバルディ地方に関する A. C. プルの89年論文に代表されるように、対象地域を拡大し、同時に時代射程を伸ばしながら、研究は一段と活性化さえしている (Petmezas 1990 : Bull 1989 : 馬場 1993 : 平井 1994)。逆に、こうした状況があったからこそ、ドイツの三人組は、それまでに発表された膨大な研究業績に基づく「プロト」論争の中間総括を行い、77年の共著の緒言で提示した「仮説」の再検証を余儀なくされている (Kriedte et al. 1992 : 本論末尾に挙げた文献一覧も参照)。

そして、実は、この消極・積極の相反する評価は、それぞれ82年以降の研究動向の一面を的確に突いているのである。消極の評価は、W. ライニングハウスの90年著書に設けられた特別な節の表題、「プロト工業とプロト工業化：限界上の概念」 (Reininghaus 1990, 81-91)、あるいは M. バーグが91年論文に置いた節の表題、「限界上のプロト工業化」 (Berg 1991, 4-5) に象徴されるテーゼ派の限界摘出を、そのまま理論の全面「解体」と捉える。他方、積極の評価は、U. ピスターの89年論文の表題、「プロト工業化と人口変化」 (Pfister 1989)、あるいはクワッテルトの88年論文の表題、「工業化の新見解. プロト工業か資本主義的環境における小規模・労働集約的な製造業か」 (Quataert 1988) から看取できるように、批判の濾過器を通した上で論争の成果を受容し、展開していく方向を代表する。

従って、これら一見対立するかのような見解も、テーゼ派の限界を銘記する点では相通ずるものがあり、結局両者の違いは、テーゼ批判のあり方とその克服の仕方にある。そこで現在急務とされる作業は、プロト工業化論に向けられ

1) 1994年5月社会経済史学会において農村工業をテーマとするミニシンポを組織された石坂昭雄教授も、同様の見解を表明されている (石坂 1994)。社会経済史学会がおよそ10年おきに編集する、『社会経済史学の課題と展望』の84年版に載せられた、プロト工業化の項目が92年版では消えたことも、その間の関心の変化の象徴的な表現とも見なせよう (社会経済史学会, 1984, 92 : 二宮 1982)。

たさまざまな次元の批判を冷静に見据え、それと絡めテーゼの丸のままの受容拒否の理由を見極めることである。これが、本稿の第一章の課題となる。続く第二章では、多数の問題点の摘出にもかかわらず、「プロト」論争が衰えをみせない、その理由を問い、併せてこの論争を跳躍台に新たな方向に踏みだした二三の業績を紹介する。最後に、論争の現状に立ち、グローバルな分析単位・理論との対比も睨みながら、地域史としてのプロト工業化論の可能性を探る。

I. 「プロト工業化」論批判の展開

理論全体の拒否、あるいは部分修正後の受容のいずれであれ、プロト工業化論に向けられた様々な批判を検討する前に、テーゼ派の理論的概要の紹介から始めよう。

(1) テーゼ派の理論概要

メンデルスが、18世紀フランドルの麻織物工業に関する研究成果に基づき提示した72年理論は、82年第8回国際経済史会議への49本におよぶ寄稿論文を基礎に再編成・洗練化されることになった。それは、学説史的には伝統的農業社会から近代的産業社会への「離陸」論を通じて周知のW. ロストウの成長史学の系譜を引いているが、その理論支柱は次の5点に集約できる(Mendels 1982, 78-82を参照)。

第一に、工業化は地域的現象であるとの認識から、分析単位に据えられるのは、国民国家ではなく地域なこと。

第二に、農村に立地する域外・国際市場向け的手工業生産で、局地向けの副業を除くこと。

第三に、その担い手は、季節失業の状態にあり零細保有から家計補完の必要な農民なこと。

第四に、プロト工業と商業的農業との地域内・地域間分業が形成されること。

第五に、都市の担う役割は、仕上・準備工程のための集中作業場の立地を除けば、問屋制的な生産組織の拠点と商業機能に留まること。

これらの条件を具えるプロト工業地域は、農業・手工業・人口動態の相互作用による変化を通じて、近代的工業化への移行を促進するといわれ、それは次の5仮説にまとめられる。

第一に、土地から遊離した稼得機会＝手工業賃金の導入により、それまで土地・家督相続に規定され晩婚・少産傾向にあった人口調整メカニズムが崩壊し、早婚・多産型と高婚姻率型の社会に移行し、将来の工業プロレタリアートの予備軍が形成されたこと。

第二に、問屋制度の外延的な発展に伴い顕在化する、原料・製品の集配の時間・距離的拡大と品質管理の不徹底のため、労働集約的で分散的な生産組織は収益限界に到達し、その克服のため資本集約的で集中的な工場制への移行が余儀なくされたこと。

第三に、プロト工業地域内の企業家・商人・地主の掌中で、工場制への移行に不可欠な資本蓄積が行われたこと。

第四に、プロト工業は、企業家にとって将来の工場経営に必要な生産・マーケティングのノウハウを習得する「訓練場」を提供したこと。

第五に、プロト工業と並行した商業的農業の発達により、工業化による急速な都市化のための廉価で潤沢な食料供給が保障されること。

もっとも、プロト工業地域の全てが、機械制＝工場制への移行に成功したわけではなく、「工業化の挫折」de-industrializationの可能性も指摘され、「工業化の第一局面」を高らかに謳い上げた72年論文よりは、因果連関の点で大きく後退

した印象は免れない。

これに対してドイツの三人組は、封建制から資本主義への移行の第二局面にプロト工業化を位置づける。1977年の共著の緒言から読み取れる「仮説」に従えば、次の構想が共有されている。第一局面＝中世盛期は、中世初期の古典荘園を軸とした労働地代による余剰の領有と自然経済的編成の解体、とりわけ生産物・貨幣地代への移行に伴う農民経済の自立性の拡大を基礎に、中世都市を核とした都市・農村間分業の形成される時期と理解されている²⁾。この関係は、大航海時代以降の急速な市場拡大のなか、その限界を露にしてくる。とりわけ、都市手工業を支配するギルド制度のため、市場拡大に見合った供給の弾力性に欠け、また労働コスト節減にも限界があった。このような状況のもと商人＝企業家は、生産立地の農村への移転を積極的に推進した。とりわけ、封建制（領主制・共同体）の関係が弛緩し、農業以外に所得補完の必要な零細保有・土地無農民が、受け皿として幅広く形成された地域で、それは顕著な展開を見せたという。そこに、クリーテとメディックの言うところの「封建制解体の要素が、そのまま形成途上の資本主義の構成要素となるプロト資本主義」（Kriedte et al. 1977, 31）が成立する。R. プレンナーの農民的世界とI. ウォーラーステインの世界経済の連結という壮大な構想のもと、伝統的農家族で支配的な使用価値の体系＝「全き家」と、商業資本主義の担い手の商人＝企業家との交互作用による、プロト家族経済の社会経済的変容と階級社会への転換とが、追求

される（Brenner 1977：藤瀬訳 1990：田北 1993b, 1994を参照）。その際、チャヤノフの「小農経済の論理」が援用され、労働コスト節減に加え「自己搾取」を通じた差額利潤の取得による高い資本蓄積が強調される（その紹介と批判は、高木 1992：友部 1992）。しかし、プロト工業のプロメテウスのな変幻自在性のため、メンデルス同様に、「工業化の挫折」も想定されており、特に工業化への移行の必要十分条件には、国家の政策・資源分布・交通条件などモデル外生因が引き合いに出されていることを確認しておく³⁾。

（2）テーゼ批判の展開

1982年の概括報告においてメンデルスは、プロト工業化論の仮説としての当否を寄稿論文49本をもとに検討し、その有効性を主張した。すなわち、プロト工業の存否が、直接、工場制工業への移行の成否に結びついた例を、仮説の肯定的検証と考えた場合、その反証となるケースは2例に過ぎなかったというのだ（Mendels 1982, 105-7, 邦訳 114-5）。メンデルスによるこの牽強附会的な総括にもかかわらず、実際には、ネオ・マルキスト版も含めテーゼ派の理論は、集中砲火に曝された。なお、その批判の矛先は、理論全体、あるいは個々の内生要因・外生要因と様々な次元に向けられてはいるが、プロト工業化から工業化への単線の発展論への懐疑が、多くの歴史家に広く共有されていたことを忘れてならない。もちろん、精緻な史料分析に基づく地域研究の成果と一般理論との大きな

2) 今日、中世初期西欧経済において在地・遠隔地を問わず広範な商品・貨幣流通が検出され、自然経済と捉える見方は退けられていることを明記しておきたい（とりあえず、森本 1988：佐藤 1991：丹下 1992を参照）。

3) シュルムボームは、他の二人と違ってプロト家族経済と商人資本家の織りなす独自のシステム性を受け入れず、売買システム・問屋制度・マニファクチュアなど多様な経路を通じて資本・賃労働関係に傾斜していく舞台装置の一つと理解する。

乖離という共通の理解が、その根底にあったことは間違いない。そこで、この単線の発展論批判という大きな流れに沿って個々の論点を概観しよう。

第一に、プロト工業地域の工業化への移行の成否を問うことで、理論の有効性を移行の推進力ともども問題とする試みがある。コールマンの83年論文は、16-17世紀イングランドの代表的な農村工業地域12を取り上げ、そのうち工業化を達成したのは4例に過ぎないこと、その際の推進力は、農業・手工業・人口動態の相互作用＝モデル内生因というよりは、むしろ石炭・鉄鉱など資源分布なこと、の2点を明らかにした(Coleman 1983, 439-45。ドイツの場合も成功例は同水準に留まる。Tilly 1990, 222)。このモデル外生因として自然資源以外にも、需要・市場条件、対外競争や国家の政策的舵取りの重要性が、広く指摘されている(Berg 1991, 4-5: Clarkson 1985, 28-38: Quataert 1988, 14-6: Gorisser/Wagner 1986, 168-70: Mager 1988, 279-84)。E. ハーダー＝ゲルスドルフは、工業化前夜・工業化期の麻織物地域に関する概観論文において、メンデルスの理論構築の基礎にある麻織物工業が、本来、工業化の主役を果たさなかったと述べ、工業化の第一局面の定式化自体への疑問を呈する(Hader-Gersdorf 1986)。この論点に決定的な重要性を認める限り、テーゼの解体を結論することも、あながち的外れとは言えない。

第二に、手工業所得の農業部門への再投下に注目し、プロト工業化を農工分離の進行にとって一種のスプリングボードと見なす立場にも疑問を投げかけ、それと同時に農業・手工業の多様な結びつきを浮き彫りにしている。この関連では、U. ピスターが18世紀チューリヒ空間の織

維工業を対象にし、新古典派の経済理論の援用から「家族経済」の行動原理を再構成した92年論文が、注意をひく(Pfister 1992)。所得極大化のための農業・手工業間の最適な労働配置を鍵概念に据えながらも、制度要因(共同体・領主制)の介在、土地所有規模の格差と農作業リズムの違い、性別分業の在り方やライフサイクルに応じた変化、繊維工業(麻・絹・綿)間の労働リズムの相違も留意した研究から、双方の限界生産物の水準やライフサイクルにより農業への投資機会を広く検出した(類似の指摘は、Quataert 1988, 6-14: Mager 1988, 284-300)。ドイツの三人組は、その間の実証研究の進展を踏まえて、「我々の理論志向的な概観論文は、元来、農業・家内工業間の多様で複合的な相互関連の把握を目的に構成されてはいなかった」(Kriedte et al. 1992, 233)と自己批判を行い、さらに農業・農村社会との強い結びつきを、次のような巧みに表現した。「地域・局地毎に多様な刻印を受けた、農業の経営方法・生産関係は、手工業の特別な条件や、その担い手の所有・稼得・生産諸関係のような社会的な横顔を決定づけた」(op. cit., 235)。ちなみに「農業への回帰」現象も、「工業化の挫折」のような消極的文脈ではなく、余剰の貯蓄・投資・内部市場拡大を挺子とした地域間分業の深化という積極的文脈で捉え直されねばなるまい(Berg/Hudson 1992)。

第三に、第二点と絡めて、プロト工業の担い手である、農民家族の工業プロレタリアートへのスムーズな転換についても反省が迫られている。D. レヴァインは、77年『発生期資本主義における家族形成』を上梓し、マルクスの原蓄論を下敷きに資本の労働過程への緩やかな浸透ぶりを、世界市場に生活条件を左右される農村家

内労働者に特有な人口行動パターンと絡めて論じ、メディック流の家族経済論を提示したが、近著では裾野の広いプロレタリアート形成史の一つの道と軌道修正した (Levine 1972, 1984)。その背景には、上記の農工結合の多様性と並んで、特に零細農民・土地無農民が農村社会に占める地位をめぐる議論の深まりがあった。すなわち、零細農民は、一筆の土地所有を理由として土地無層とは明白に一線を画し農民社会の一員をなしていたというのである (Quataert 1988, 11-4)⁴⁾。その点を、ドイツの三人組の表現を借りて言えば、次の通りである。「ごく小規模な地片でさえ、その所有者を大量の無産者から際立たせて、少なくとも外形上は、(零細・土地無農の構成する階層の) 境界を越えて農民の隊列への帰属を要求する」 (Kriedte et al. 1992, 238)。ちなみに、19世紀に至る農工兼業の長期持続も、小生産者独自の労働リズムの存続と並んで上記のようなプロレタリアート化への反証に挙げられていることを付言しておきたい (Sundin 1989)。

第四に、プロト工業の生産組織を問屋制的な家内工業と前提し——それ自体、都市工業の供給の非弾力性や相対的なコスト高の克服を図るべく商人＝問屋主が農村部に資金投下したとする見解に根をもつ——、その外延的な成長限界の克服として工場制への移行を説く立場にも様々な批判が寄せられている。換言すれば、上述の農業と手工業の多様な結びつきは、原料・製品市場への接近可能性とも相俟って、プロト工業の生産組織の多様性を浮き彫りにしたので

ある。P. ハドソンは、ウェストライディングの紡毛・梳毛工業の辿る異なった発展経路を、荘園制の解体状況に象徴される制度要因や地誌的環境の違いも考慮しつつ追跡し、小生産者型と問屋制型との構造を対比してみせた (Hudson 1983)。同じ見解は、Schlumbohm 1983 : Quataert 1988 : Berg 1985 : Gutmann / Louboutte 1984 : Mager 1988 : Kaufhold 1986 にもある)。ここで注意しなければならないのは、小生産者型の発展を、ギルド精神に囚われた近代的進化の阻害要因ではなく、むしろ洗練された手工業的技量を基礎にした、市場・技術変化への敏速かつ柔軟な対応と理解していることである (Berg 1985, 83-4 : Hudson 1986 : Pollard 1991 : Gorisser / Wagner 1986)。このような見解は、70年代以降の手工業・ギルド史研究の新潮流と重なり合っていることを確認しておきたい (Kaufhold 1984 : Reininghaus 1990 : 田北 1987a)。

この多様な生産組織への注目と並んで、繊維工業以外の部門と集中作業場への視野拡大の必要も叫ばれている。W. シュトロマーは、「農村家内労働の形をとった大量の繊維生産は、(近代的工業の前段階として) ほとんど決定的要因を提供できなかった」 (Stromer 1986, 44) と述べ、近代的工業の歴史的起源を大規模経営＝プロト工場に求めて、繊維地域を始め鉱山・金属加工業、皮革・製紙業の分析に力を注いだ (同じ立場に、Mager 1988がある)。こうした積極的な対案の提示に至らないまでも、農村の潜在失業・所得補完の必要な零細農民の活用というプロト工業化論の前提に合致しない固定投資の比較的大きな業種を除外する姿勢は、多くの歴史家から強く再考を迫られている (Clarkson 1985, Berg 1985 : Gorisser / Wagner 1986 :

4) H. シュルツ女史も、零細農民・土地無農民を併せてプロレタリアートの先駆形態と捉えている (Schultz 1984, 1985 : マルクスのマニユ概念を援用したシュルツのプロト批判の概要は、田北 1987b を参照)。

Bull 1986 : Komlos 1989)。しかし、それにも増して注目したいのは、性格を異にした複数の業種の立地する——それ故、いわゆる産業史の枠内に収まらぬ——、地域での労働力・資金調達を始め広範な社会経済的変容を追跡する方向だが (Kaufhold 1986 : Coleman 1983)、この問題には次章で立ち返る。

第五に、農業社会への手工業所得の導入を契機とした早婚・多産・高婚姻率社会への移行、あるいは商業資本主義・「全き家」が複雑に絡み合ったプロト家族経済論は、プロト工業化論の最もお気に入りなテーマをなしているだけ、その分活発な論議を呼んでいる。この論争の現状につきドイツの三人組が「葛藤に満ちたもの」(Kriedte et al. 1992, 75) と表現したように、賛否両論相拮抗しているが、少なくとも、テーゼ派の主張は、もはや丸のままでは受け入れられない。以下、3点に限定して最近の成果を紹介しよう。

まず、プロト工業村落に伝来する人口データに関する精緻な統計分析から、早婚型社会への移行仮説の検討が進められた。M. P. グートマンは、17世紀半～18世紀末ヴェルビエ地方の5つの羊毛工業村落・小都市を対象に、およそ6650人の女性の初婚年齢や物価史料を駆使してテーゼを俎上に載せ、結婚行動を規定する手工業以外の多様な社会経済・政治要因を摘出した (Gutmann 1987 : Gutmann/Loboutte 1984 : Pfister 1989 : Houston/Snell 1984 : Lehning 1983 : Schlumbohm 1992)。ただ、グートマン自身、「メンデルスの見解は、相変わらず、結婚

と初期工業化との結びつきに関する最良の所見を提供している」(Gutmann 1987, 144) と述べ、テーゼの全面否定を意図していず、「葛藤に満ちている」⁵⁾。そうした背景には、プロト地域の農業地域を大きく上回る高い人口密度と急速な人口増加の検出がある (Sundin 1989 : Pfister 1989 : Klima 1989)。ドイツの三人組は、「プロト工業化は、たとえ早婚を無条件に強制するのではなく、多様な形をとってではあれ、地域の枠内で急速な人口増加を可能にしたとする基本テーゼは、やはり正しい」(Kriedte et al. 1992, 86) と苦悩に満ちた総括をしたが、プロトが先か人口増が先か、あるいは出生率上昇か死亡率低下かをめぐっては、まだ争論の余地がある。

次に、プロト工業の生産組織の特性と関連して、土地から遊離した稼得機会の導入が、必ずしも新規の家族形成に結びつかない事例も多数報告されている。G. ガリクソンは、18世紀フランスのコウ地方の綿工業を扱った著書の中で、19世紀前半紡績から織布への重心移動に伴う同職婚の著増までの婚姻パターンの安定性を、性別分業の貫徹——手工業労働が、もっぱら女性に限られる事実——から説明した (Gullickson 1986)⁶⁾。すなわち、肥沃な穀倉地帯に位置するコウ地方にあって零細農民は、資本主義的な大農経営で農業労働者として働き、労働市場で農業部門と競合しない女性が、所得補完のため紡績労働に従事したという。それと並び強調される重要な点は、メディック説と対照的に、プロ

5) グートマンとルブーテの84年論文は、金属加工村落における晩婚型の長期持続に注目し、その原因を、中世以来長い伝統をもつ農村社会のプロト工業化への穏やかな反応から説明し、手工業の新規導入による劇的な衝撃との区別の必要を強調して興味

深い (Gutmann/Loboutte 1984)

6) プルに従えば、ロンバルディ地方の受益小作制下の農民＝男性は、女性の手工業所得の搾取を梃子に社会経済的上昇を図っており、家父長制的支配下の女性の地位低下さえも観察できるという (Bull 1986, 180-2)。

ト工業は女性の地位向上の契機にはならず、かえって低賃金・過酷な労働と家事・育児とのかけ持ちを強いて、織布期にも男女間の職種・賃金格差を温存・増幅したことである (Berg 1985: Berg/Hudson 1992: 今井 1993)。それ以外にガリクソン論文ではプロト工業の立地する地理的条件や、都市・農村の相互依存——ルーアン市場との近接・好適なアクセス条件、都市側の供給限界、商人＝企業家の労働力需要——についても重要な論点が提示されていること、を確認しておきたい。

最後に、プロト工業に従事する家族経済を使用価値の体系、換言すれば市場との関係の希薄な「全き家」と理解するメディックの見解に対しても、批判が浴びせられている。M. コーエンは、18-19世紀アルスター地方の麻織物工業を例にしてメディック説の限界を、農民の顕著な階層分化と多様な形態の賃金労働の利用、および比較的大きな固定投資の必要な集中作業場＝漂白場の等閑視として鋭く指摘した (Cohen 1990: 同じ見解は、Collins 1982: Clarkson, 1985: Berg 1988)⁷⁾。この労働市場を通じた家内工業における労働需要の柔軟な調整は、当然、家族協業を前提に構成された多産＝拡大家族形成論にも疑問を投ずることになる。また、第二の論点は、プロトから近代的工業化への移行を考える上でも見逃せない。農民＝織布工の小規模な資金蓄積による資本家への上昇可能性も言及されているが、機械制への移行の最終的な推進者となった層は、織布工＝資本家ではなく、

漂白工や大規模な織元と捉えられているからである⁸⁾。ちなみに、グートマンは、プロト工業従事者の早婚型行動パターンの「不可逆性」を主張するメンデルス説を組上に載せ、むしろ一定のタイムラグを伴う物価変動に対する意思決定の産物に他ならないことを論証したが、それも市場経済との密接な結びつきを前提としている (Gutmann 1987)。

それ以外にも、テーゼの理論・実証上の難点は、数多く指摘されてきた。ドイツの三人組とクワッテルトは、それぞれ近業において「プロトの歴史人口学、社会構造と手工業・農業の絡み合いの多様性、近代的家内工業」、「近世の製造業と農業、連続と断絶、第三世界の発展」と力点の異なる3項目に収斂させつつ研究史の中間総括を試みているので、個々の内容と関連文献は両論文に譲り、この場では筆者の専門領域の都市史に限り、瞥見しておきたい (Kriedte et al. 1992: Quataert 1988)。

まず、プロト工業化の前提とする都市・農村の概念的な区別は、決して容易ではない。K. ゲルタイスは、『近世ドイツ都市』と題する1986年に上梓された一般的叙述において、7項目からなる指標束を設定しつつ、近世都市固有な概念規定に苦慮する (Gerteis 1986, 13-17)⁹⁾。ドイツ

7) プロト家族経済は、それぞれの制度・文化的条件にも規定され、様々な次元の「非市場価値・社会価値」や濃密な人間関係に支えられながら展開するとはいえ、所与の環境のなかで一定の合理性をもって市場経済に対応していたという (Berg/Hudson/Sonenscher 1983, 1-32: Berg 1986, 69-91: Pfister 1991)。

8) このプロト家族による資本蓄積の可能性と関連して、プロト工業地域における早婚・多産型の人口行動による労働力の供給過剰と貧困の再生産説には、貧困化・プロトの因果関連への疑問や実質所得の上昇・内部市場拡大の角度から批判が寄せられている (Clarkson 1985, 49-50: Coleman 1983, 442-5: Stromer 1986, 76-80)。

9) ゲルタイスは、都市法、領域的団体、手工業・商業の凝集点、行政的拠点、中心的な軍事機能、高い教育・文化・サービス機能、高い計画性を挙げる。それはE. エネンらが中世都市の概念指標に掲げる、地誌・景観、社会経済構造、経済・政治・宗教・文化的な中心地機能と重なり合っており、近世特有の概念規定の困難さを逆照射している (エネンらの都市概念は、田北 1986, 139-54)。

の三人組も、77年共著段階では、人口の高い稠密度、商工業の集中、都市法の存否、及びツンフト制度の有無の4指標による都市・農村の峻別の限界を銘記し、「準都市」quasi-Stadtも農村に含める慎重な姿勢を示しているが、その後の論争にあってこの論点は、霧散してしまった感を否めない(Kriedte et al. 1977b, 28-9)。例えば、批判への回答を意識して書かれた82年論文でも、一方で都市を域外市場向け生産拠点の大都市に限定したかと思えば、他方では「小規模なラント都市」「ツンフトのない小都市」、と様々なレベルで概念を使い分けて視点のブレを感じさせるからである(Kriedte 1982, 20-1, 50)¹⁰⁾。ちなみに、K.H. カウフホルトも、近世ドイツの「手工業地域(Gewerbelandschaft)」39箇所の類型区分を試みた86年論文のなかで、都市・農村の境界の流動性を指摘する(Kaufhold 1986, 175-9)。そこでの重要な論点は、都市・農村の多様な複合的な分業関係に鑑みると、もはや二分法でなく「共生」こそが重要なのだというのだ(類似の指摘は、イギリスのBerg et al. 1983, 25-8: Clarkson 1985, 25: Hohenberg/Lees 1985, 102も参照)。狭義の農村工業、ないしプロト工業化に代わり、「手工業地域」概念が提示されるのも、この辺りの事情を考慮してのことである。

第二に、都市の担う多様な経済機能の照射から、都市をもっぱら商業・市場中心地、あるいは問屋制的組織・仕上拠点と理解する、プロト工業化論の限界が鋭く指摘されている。クラークソンは、プロト工業化の研究対象の狭隘さ批

判の文脈でこの問題に言及し、農村の在地市場向け手工業と、鉱山・冶金・製紙など大規模な固定投資の必要な集中作業場と並んで、都市民多数の従事する在地市場向け手工業の重要性に注意を喚起した(Clarkson 1985, 15)¹¹⁾。プロト工業化論は、元来、生産単位に「家族経済」を設定し、労働大衆の生活全体の再生産をできるだけ現実の諸関係に密着させ——裏返せば、平板な階級形成史に還元せずに——考慮する点で特徴的であり、逆にそれだからこそ幅広い共感を呼んだことを想起するとき、都市に立地する多様な日常品生産を軽視することは許されまい(Reininghaus 1990, 81-91)。この点では、都市の商業・交通・金融ネットワークを基礎とした手工業者の柔軟な対応力と関連してバーグが述べた、次の表現が参照されるべきである。「プロト工業化をめぐる論議は、商業と手工業、都市と農村を総合すべきだった。しかし、それと裏腹に、かえって分断してしまった」(Berg 1991, 6)¹²⁾。

都市の経済機能は、狭義の手工業生産に留ま

11) シュルツは、域外市場向けに限らず、農村工業全体への視野拡大の必要を力説したが、第8回国際経済史会議の概括報告にあって、「シュルツは、プロト工業化を農村手工業全体と関連づけ、特に肉屋・パン屋・蠟燭作りのような局地市場向け手工業の成長が、プロト工業化への道を切り拓いたと論じている」と簡単に片づけられている(Mendels 1982, 邦訳 110)。

12) C. ポニーは、中世後期以降の都市輸出産業の問屋制度を梃子とした周辺地域への拡大を念頭に、次のように述べてバーグと同じ見解を表明する。「(アントワープ、アムステルダム、フィレンツェ、ヴェネチアのような)歴史の古い初期資本主義の中心地が、近代的な工業化の夜明けに重要な役割を果たさなかったことは、間違いない。しかし、より重要なことは、現象の複合性である。ドイツの三人組は、農村のプロト工業化における農業・工業・人口の織りなす複合的で可変的な関係に対する我々の知見を豊かにしてくれた。彼らが着手したことを継続して、ヨーロッパの都市・農村間の経済諸関係の網目の説明に取組んで欲しいものだ」(Poni 1985, 314)。

10) この論文では、それと併せて都市工業・農村工業の対立を越える多様な手工業関係を念頭に、立地移動 Verlagerungではなく、拡大 Ausweitungが強調され、二項対立図式の回避も図られている(Kriedte 1982, 25-31)。

らない。W. シュトロマーは、中世盛期以来国境横断的に形成された繊維「手工業地帯」が、若干の重心移動を伴いながらも近世まで連続する事実を目を止め、その持続的發展を支えた条件を追究した (Stromer 1986, 44-80)。「大都市を拠点とし、多数の中小都市・市場地を伴った高い定住密度」(op. cit., 55)、高い生活水準・文化を牽引力とする域内市場の拡充、食料・原料・製品市場への至便な交通アクセス、熟練労働力・品質管理・自律的な経済運営、経済局面・嗜好の変化への敏速な対応を可能にする情報網、技術変化の積極受容などを駆使した、高い経済的舵取り能力を強調した。プロト工業化論の前提する域外市場＝域外の吸引力より、域内諸力の重要性が前景に押し出されるが、その中心に据えられるのが、広範な「自治」を享受する都市の生産・流通・金融・交通・情報・消費全体にわたる経済活力に他ならなかった。

第三に、都市手工業に固有な供給の非弾力性の元凶、あるいは労働コスト節減の最大の難敵として、農村部への生産立地の移転をかえって促進したといわれる、ギルド・ツンフトをめぐる軌道修正は避けられそうもない。旧東ドイツの H. シュルツの農村ツンフトに関する研究成果の紹介から始めよう (Schultz 1981, 1983b, 1984: 詳細は田北 1987b, 148-51 をみよ)。まず「後期封建制期を通じて農村には、これまで考えられてきたよりはるかに多くの手工業ツンフト組織が存在しており、実際、農村工業にとってツンフト組織は、原則と言えるほどだった」(Schultz 1983b, 349)と表現されるように、グルントヘルシャフトとグーツヘルシャフトの地域を問わず、広範な農村ツンフトが検出される (Reininghaus 1990, 71-2 も参照)。次いで、資本主義発達史に占める農村ツン

フトの意義について興味ある指摘が行われる。「この(高い技術水準)観点からすれば手工業は、資本主義的生産関係の形成にとって発展促進的な要因だった。それとの関連でツンフトの担う役割に関しても、より厳密な新たな研究が必要であろう。資本主義発展の主要な障害は、ツンフトに求められるべきでない」(Schultz 1981, 208)と述べ、18世紀マニユ資本主義の本格的展開までと時代を限定しながらも、その積極的役割を強調した。その背景には、1970年以降の「生業説・反動テーゼ」の根本的批判・解体と、統計分析に耐える動態像の模索という新潮流の台頭があるが、詳細は別稿に譲る (田北 1987, 1993a)¹³⁾。この場では、ドイツ以外でも類似の批判が寄せられていることを、確認しておきたい。イギリスのバーグラは、「都市のギルドと農村の『自由な』工業との区別の大半は、実際の都市産業に関する検討に基づいているのではなく、共同体的規制からの推論に依存している」と、規約に代表される法規範と現実との乖離にも注意を喚起しつつ、ギルド規制外の都市工業と農村ギルドの広範な存在を指摘した (Berg et al. 1983, 28-9: マンチェスターの例は、Berg 1985, 161-2: 都市におけるツンフト営業独占権外の手工業の展開は、Swanson 1988: Poni 1985 も参照)。

次に、都市手工業の高度に洗練された技量やツンフトの優れた品質管理能力に注目し、経済局面・市場状況への柔軟な対応力を強調する見解もある。ヴァン・デア・ヴェーは、南ネーデ

13) カウフホルトは、都市工業に行使できるツンフトの影響力の後退と、ツンフトによる経済規制の実効性の限界を指摘しつつ、「その(ツンフト制度の)障壁は、研究文献の中でしばしば一般化して主張される程高くなかった」(Kaufhold 1986, 190-201)と述べた。

ルラント繊維工業を扱った論考において時代を追った需要構造の変化も脱みながら、工程・製品間分業による大都市・中小都市・農村間の重心移動と「棲み分け」を追究したが、その鍵概念の一つが、都市の人的資本・柔軟な組織的対応力に他ならなかった (Van der Wee, 1988: 類似の見解は, Stromer 1986: Hohenberg/Lees 1985, 125-130: Takita 1994)。また、バーグは、18世紀バーミンガム小型金物業を扱った論考において製品種をめぐる市場動向の目まぐるしい変化への敏速な対応力を、手工業者の熟達した技量と創意工夫を凝らした道具使用とに求め、併せて蒸気力を始め技術革新の成果の受容を契機として小生産者の労働リズム・規律に生じた変容過程を跡づけた (Berg 1985, 287-314: 金属工業を素材とした類似の業績に, Gorisser/Wagner 1986がある)。このような見解が、ツンフトによる技術革新の受容や創意工夫による「利潤蓄積」を始め最近の手工業史・技術史の研究成果に立脚していることは、言うまでもない (田北 1987a, 426-9)。

最後に、都市史の研究方法として広く継承されてきたシステム・ネットワーク論を援用しつつ、都市・農村の交互作用の観点からプロト工業化を見直す方向もある。この試みは、上記の都市・手工業史をめぐる研究動向とも密接に関連すると思えるので、簡単に言及しておこう。P. ホーエンバーグとL. リースは、1985年の共著『都市的ヨーロッパの形成』のなかで、14世紀～18世紀をプロト工業期と呼び、近代都市システムの起点へと積極的に位置づけながら¹⁴⁾、

農村工業論としてのテーゼの限界を次のように表現した。「それ (プロト工業) が繁栄したのは、都市か農村かではなく、都市的・農村的場所の双方と地域的な都市階層序列の多様な構成要素とを包括する、相互補完的なシステムとしてであった」(Hohenberg/Lees 1985, 130)。換言すれば、「農村工業地域を、資本・原料・商業サービスを提供する都市グループと緊密に結びつけ」(op. cit., 104)、都市に立地する、品質統制、市場・モード変化への柔軟で敏速な対応、および高価な原料・特殊な技量の必要な手工業製品の市場も形成したという¹⁵⁾。このシステム・ネットワーク論の観点からすれば、プロト工業化は、近世の経済重心の北漸に伴う広域的な商業ネットワークの再編過程と、それと並進する中核都市の後背地の中心地システム——域外諸力 (プル要因) と域内諸力 (プッシュ要因) の交互作用のもとに生ずる生産・流通システム——の編成替えの接点に位置づけられることになる¹⁶⁾。

14) 都市発達史上で中世後期は、中世盛期の自由都市と近代産業都市の狭間に位置する、質量両面での発達の「谷間」と理解されてきたが、近年中小都市研究の進展につれ、積極的に捉え直す姿勢が浮上してきた (この中世都市側の研究動向は、田北 1992)。

15) ド・フリースは、近世を港湾都市・居城都市の類型を除き、都市発達史上の停滞・後退期と捉えながらも、プロト工業化進展の基盤を既存の都市ネットワークに求めて、次のように言う。「大半のプロト工業化の物理的状況は、もちろん農村的だったが、農村の大規模な遠隔地市場向け的手工業生産は、コミュニケーション・調整、すなわち都市に依存していた。単なる農村的状況ではなく、これら新たな発展の地域的文脈を、強調する方がより有益である」(de Vries 1984, 8-9)。

16) 中世後期以降のマルク＝ヴェストファーレンにおける北から南へ、大都市から中小都市への経済重心移動もその先駆例とも解釈できよう (Reininghaus 1989, 13-9)。東西商業路沿いのゾースト、ドルトムントの停滞を補うかのように「東部の農耕地域と山地のちょうど中間部に位置する、小規模な場所が、遠隔地商業も接合する在地的な市場拠点へと上昇し」(op. cit., 14)、低地諸邦市場向けの繊維・金属工業と石炭採掘が急成長して、中心地システムの編成替えが進行したからである。

II. 「プロト工業化」から「手工業地域」へ

メンデルスとドイツのネオ・マルキスト三人組によって提示されたテーゼ派の理論は、上述の通り、理論・実証両面から厳しい批判に曝され、少なくとも近代的な工業化に向けての単線的発展モデルとしての有効性は、既に否定されたと総括しても過言ではない。そのことは、内生的な動力学による駆動力の想定、あるいはそれと不可分のモデル構成の仕方、の限界の露呈とも解釈できる。しかし「プロト」を表題に掲げた研究業績の公刊数から判断する限り、関心は、一向に衰えをみせず、逆に根強い持続をさえ示している。ライニングハウスは、その点を次のように印象的に表現した。「1970年代後半から続くプロト工業化・プロト工業をめぐる論議は、その激しさと忍耐強さの点で、1900年前後数十年間の家内工業に関する論争に似ている」(Reininghaus 1990, 81)と。このようなテーゼに向けられた根底的批判のなかの研究持続の意味を問いつつ、1982年第8回国際経済史会議以降に浮上してきた、二三の新たな方向を整理しておこう。

(1) 「プロト工業化」論継承の背景

最初に、プロト工業化論継承の代表例の紹介から始めよう。

G. シュランクは、1992年スコットランド北端部のオークニィ諸島を対象に「プロト工業化」と「工業化の挫折」を、強固な地主制とイングランド商人資本の結合という地域内外要因と関連づけて追究したが、その冒頭で「プロト」理論継承の理由を次のように述べる。「プロト工業化理論の援用により、これまで個々別々の副次的現象として研究されてきた多様な要素を単一

の歴史的パターンに統合することが可能となる」(Schränk 1992, 365)。これまで麻織物・蓑編細工・ケルプ(カリ)生産と個々の産業史の枠内で扱われてきた問題を、地域史に収斂させ、同時に商業史・土地制度史と絡めつつ総合的に考察するための道具建てとなるというのである。

J. クワッテルトは、労働集約的な小経営が資本主義発達過程で担った重要な役割の再評価の文脈で「プロト」理論を継承して、もう一つの批判的受容の仕方を代表している。「単線的発展論の一変種として「プロト」テーゼの受容を拒否する人々にとっても、この新しい概念は、産業資本主義の成立をめぐる経験的研究にとって、より広い脈絡において考察する手助けとなる」(Quataert 1988, 4)と述べ、家族・地域・世界経済とミクロからマクロまでの分析単位と、農業・手工業・商業・人口動態と多様な分野とを包括する複合モデルとして、その「部分モデル」(斎藤 1985, 19)展開の豊かな可能性を指摘した。また、バグらが、「その単線的発展論としての限界にもかかわらず、工場制以前の製造業の起源・特質・含蓄に関する有益な研究を促した」(Berg et al. 1983, 20)と述べて、「プロト」論争の積極的な寄与に掲げたのも、このモデルの複合性に他ならなかった。

このように「プロト工業化」論は、地域レベルの「全体史」構成のための道具建てとして、また農業史・手工業史・経営史・社会史・家族史・制度史を始めテーゼに含まれる「部分モデル」の継承・発展の形で、様々な可能性を秘めている。これが「プロト」論争継承の一つの背景をなしている。

クラークソンは、歴史家による「モデル」設定の狙いを2点、すなわち一連の歴史的事象に注意を向けるための叙述的ラベルの作成と、歴

史的発展に対する一組の一般的説明の提供、に大別したが (Clarkson 1985, 9), 単線の発展論が既に退けられた現在, 第一の方向での展開といえる。しかし, 単なる「プレ」への回帰ではなく, 「プロト」概念が使用されるには, それなりの理由がある。

プロト工業化論を叩き台として積極的に受容する学說的背景に, 1960年代以降の社会史, 特に「下からの歴史」研究の急進展がある。そこで寄せられた豊かな成果は, 独自の規範・価値体系に裏打ちされた労働文化や家族・世帯の行動様式の照射から, プロト工業化論とは別の角度から, しかし地域史という同じ土俵に立って古典的な「工業化」像に再検討を迫ってきた。その際, 近世ヨーロッパに広く見られる農工兼業の小規模経営は, 19世紀の時点から「プロレタリアート」の成熟度を物差しにして回顧的に裁断されるのではなく, 同時代状況のなかには的確に位置づけ直され, それを通じて単線の発展論から「経済成長の多様な相貌と, 発展の反転——集中型から分散型へ, 工業労働から農業労働への移行——とを認識した」(Quataert 1988, 5) 複合的な発展経路が前景に押し出されることになった。以下, イギリスのプロト工業化研究の代表者, バークとハドソンの業績をもとに多少敷衍して述べてみよう。

バークらが, 83年論文集の緒言の中で提示した「工場以前の都市・農村の製造業」への接近視角が目を引く (Berg et al. 1983)。18世紀イギリスで生産される商品量・種類の顕著な増加が, 労働の季節変動・不規則性や低位な機械化・資本蓄積のものとで達成された事実を目を止め, 「非市場価値・社会価値」に媒介された独特な生産システムが問題とされる。その際, 工業化を技術・資本・工場制・市場をキー概念とし

つ, 「産業革命」「封建制から資本主義への移行」「近代世界システムの成立」の観点から読み説く姿勢を捨て, 経済要素に還元できない制度・習慣・文化要因の重要な役割が重視される。労働者の技量・道具・創意工夫による柔軟な対応, 濃密な対人的・地縁的關係に裏打ちされた独自の労働組織・規律や社会関係の投影された消費文化, 制度・共同社会関係と密接に結びついた多様な組織・発展経路が, 次のバークの表現から看取できるように, より積極的文脈で捉え直される。「両者(マルクスのマニユとテーゼ派のプロト工業化)のモデルは, 工場を労働組織の究極的な方法と, また近代的な動力で駆動される機械を, 最良の実践的技術と仮定している。この双方の達成が産業革命を画し, それ以外のあらゆる形態の技術・組織形態を崩壊に導くとされる……18世紀の製造業は, 非常に異なった状況のなかで営まれ, 多様な線に沿って組織されていたが, そのおのおのが, それぞれの環境にあつて『合理的』で正統的なものであつた」(Berg 1985, 83-4)。

バークは, 「家内工業と女性労働」「家内工業と商業における慣習と共同社会」と題する2論文において, 問屋制的関係の広がりを受け皿として女性ネットワーク, 女性労働の拡大に伴う家計内に埋没した製品需要の外化, 農村家内工業労働者の連帯と社会経済闘争の組織化を取り上げ, 18世紀の共同社会的関係・慣習を工業化の障害と見なす通説を退けて, 次のように言う (Berg 1985, 129-78)。「それらの用語 (前工業化期の社会価値, 非市場経済的な行動, 家族の生存維持型の経済, 後方傾斜的な労働供給曲線) のもとに包括される行動と特徴が, 労働リズム, 分業及び新技術の使用・受容に影響したことは確実だが, それは決して, 時代貫通的でも, 同

質的でもなかった……これらの特徴のうちプロト工業化期の重要な局面は、賃金労働、世帯の生存・消費及び共同社会関係のネットワークの特別な結びつきである。これら全ての活動拠点の空隙を埋めたのが、女性である。家族構成員の生存保障のための婦人の家事労働・賃金労働・共同社会的労働の混合的性格こそが、工業化の初期段階における資本の搾取への女性労働の容易な従属を余儀なくした」(op. cit., 175)。

ハドソンは、18世紀ウエストライディング羊毛工業の企業金融における特性を、事務弁護士 Attorney に焦点を合わせ明らかにした (Hudson 1984, 211-35)。すなわち、1840年頃から信用経済が、銀行を結節点に自律的運動を始めるまでは、地域社会に深く根を下ろし、そのときどきの貨幣需給と人的信用度を熟知した事務弁護士を媒介としてだけ円滑に運動できたという。ちなみに、近年様々な機会に指摘される、利率における顕著な地域差の長期存続も、そのような状況の反映と見なせよう (Berg/Hudson 1992, 38-9; Pollard 1991, 40-1)。

このようにテーゼ派の理論から単線の発展論の外皮をはぎ取り、地域毎の多様な制度・慣習・文化を身に着けた労働大衆の目を通して、社会経済・文化的変容と、それへの対応の足跡を辿る方向に踏みだしたのである。

(2) 「手工業地域」論の浮上

これまで述べてきたように、1982年以降の研究継続の背景は、地域レベルの「全体史」構成のための道具建て、テーゼの「部分モデル」の継承・発展、及び近代化論の外皮を脱ぎ去った地域的な社会経済・制度・文化変容の個性析出のための「叩き台」と3点に要約できる。このような研究姿勢の根本的変化を伴う新潮流を、

本論では「プロト工業化」から「手工業地域」への移行と理解したい。しかし、それを、個性をもった無数の地域史への拡散、あるいは工業化前史への回帰、と取り違えてはならない。以下、「手工業地域」論を基礎に「工業化」問題に興味ある視点を打ち出した二つの研究を紹介しよう (手工業地域に関する短い解説は、田北 1993b をみよ)。

一方は、カウフホルトが、工業化の先行・準備段階としてプロト工業化論の代案に掲げた「手工業地域」論である (Kaufhold 1986, 174-202: 類似の視点は、Stromer 1986にもある)。カウフホルトは、近世ドイツの代表的な39箇所の「手工業地域」を、産業編成 (単一か複合か)、空間的分布 (双方を隔てる境界の流動性を留保した上で、都市か農村か)、経営形態 (手工業=独立小経営か家内工業か問屋制度か集散的

表-1 39「手工業地域」の産業編成

部 門	単 一	複 合
麻 織 物	11	1
綿 織 物	4	4
毛 織 物	3	2
そ の 他	5	1

表-2 39「手工業地域」の類型区分

産業編成	都市・農村	経 営 組 織	地域
単 一	農村優位	手工業以外の組織優位	11
単 一	農村優位	多様な組織の併存	1
単 一	均 衡	手工業以外の組織優位	4
単 一	均 衡	多様な組織の併存	4
単 一	都市優位	手工業以外の組織優位	5
単 一	都市優位	多様な組織の併存	1
複 合	農村優位	手工業以外の組織優位	5
複 合	均 衡	手工業以外の組織優位	2
複 合	均 衡	多様な組織の併存	1
複 合	都市優位	手工業以外の組織優位	4
複 合	都市優位	多様な組織の併存	1

[典拠] Kaufhold 1986, 174-5, 184-5.

マニュカ)——原料・製品市場(域内か域外か)は研究の遅れを理由として類型区分の指標からは除外される——の3指標を用いて、11類型に区別することから始める(表-1, 2を参照)。この表-2をもとに「プロト」理論の簡単な検討が行われ、都市・農村関係と経営組織の2点で疑問が提示される。農村型17例、都市型11例、都市・農村均衡型11例と、農村立地が若干上回るが、価値形成への寄与も考慮するとき、農村工業の側面をことさら強調できないこと。また、集中マニュは、冶金・製紙など特殊な部門に限定され、問屋制的関係が優位に立つが、ドイツ特有の手工業の圧倒的な比率の反映として、一般化はできないこと。

それに続き、これら11類型に共通な「手工業地域」の形成・発展要因を考察する。そこに挙げられるのは、①労働力供給:農業制度(グレントヘルシャフト・グーツヘルシャフト)の差異はあれ、階層分化の広範な進行による零細・土地無農民の肥大化(都市下層民の沈黙)という量的側面と、熟練・半熟練・非熟練の適当なバランスという質的側面とからなる。②原料・半製品供給:立地条件としての拘束度は、せいぜい初期段階に留まり、後の発達にとって域外供給=地域間分業への依存が高まること、③製品市場:域外・国際市場と並んで、18世紀における経済成長・人口増加・市場参加率増加を契機とした域内・国内市場の拡大が看過できないこと、また商人対生産者の対立図式に囚われない、商業資本の多様な機能の検討の必要、の3点である。カウフホルトに従えば、それら3点と比べて、資本、技術・組織、国家の政策的舵取りは、大きな役割を果たさなかったという。

この「手工業地域」を、次ぎなるステップの工業化に駆り立てる内的動力学については、今

一つ明らかではないが、プロト工業化論と同じように、農業・手工業・人口動態の相互作用に注目した次の説明が与えられている。18世紀半ばまで人口増加は、農業部門に吸収されるが、農業生産力が低く、やがて人口扶養力の限界に達するか、あるいは農繁期の労働力基盤の確保と所得補完のための農工兼業を余儀なくする。この手工業地域の形成は、広範囲にわたる地域間分業の形成を促し、そのフィードバック効果により手工業は、一段と高い発展に到達すると。

もう一方は、バーグ＝ハドソンが、「産業革命の機能回復」と題する92年論文で展開した、「地域特化」の深化と、それら相互のせめぎ合いのなか産業社会への収斂・凝集化を強調する見解である。別言すれば、教区徒弟のような初期工場労働者が経験した激変=断絶説と、J. クラバムら計量経済史の定着とともに浮上した漸進=連続説とを、「地域的な工業化」の成果に立脚して橋渡し、再構成する方向である(Berg/Hudson 1992)。両者は、まず国民経済計算の資料的基礎と分析方法の脆弱さ——特に2部門モデルの現実からの乖離、職業統計・労働市場分析における婦人・児童労働の除外、伝統的部門と近代的部門の峻別など——の指摘から、国内総生産の成長率や投資率を低く産出するクラフツらの限界を明らかにする。次いで、国民経済計算の平均値におおい隠されがちな、工業化過程での地域間の不均等発展に注目し、「産業革命期に特異な根本的な変化」(op. cit., 26)が生じた4領域——①工場以外での技術・組織的革新の広がり、②婦人・児童労働の広範な使用、③地域特化の深化、④人口成長——に関わる研究成果を基礎にして「産業革命の機能回復」をはかる。その論旨をかいつまんで紹介すれば、下記の通りである。

①では、近代的リーディングセクターと伝統的セクターを峻別し、後者を前者の足枷と理解する見方が俎上に載せられる。「近代的セクターは、実際、伝統的セクターに支えられ、駆動されていたのであり、決して、その逆ではなかった」(op. cit., 31)と述べ、両者の不可分な絡み合いこそ、この時期の特徴と積極的に捉えられる。それと同時に、バーミンガムの金物工業における蒸気機関を動力源として共有する小生産者の共同作業場やヨークシャー羊毛工業のカンパニーミルに代表されるように、生産性上昇の幅広い裾野として工場以外の技術改良の重要性が力説される。「問屋制度、卸売・小売、信用・債務、小生産者の取り結ぶ新たな共同的形態は、はるかに競争的で革新的な環境に直面して、歴史の古い本質部分を維持するための方法として再編成された。慣習的な営みは、動力的で市場指向的な生産の要求に応えるべく前進させられた」(op. cit., 31)。②では、婦人・児童労働の使用は、家計補充と労働規律への従順・低賃金・手先の器用さと需給双方の要請に合致して、産業革命期に頂点に達したこと、それが1840/50年頃を境に「大規模企業の経営者たちは、高賃金の支払い、労働時間の短縮、団体交渉による共通利益の達成の慣習が、結果的に生産性に有利な効果を伴いながら、低賃金による外延的搾取に代替可能だというゲームのルールを修得してきた」(op. cit., 37)と言われるように、大きく後退して、いわば連続のなかの断絶が強調される。③では、経済変化の連続と表裏一体をなしつつ浮上してきた社会的連続説が、ジェントルマン資本主義論も含めて根底から批判される。経営形態の複合性、資本・労働間の多様な緩衝要素の介在及び慣習・市場諸力の交差から、ともすれば社会的変化の漸進性に傾斜しがちな姿

勢に対し、地域特化を基礎に断絶性が提示される。すなわち、19世紀半ばまでには機械・工場数の増加、家内労働の企業組織内への組み込み、都市化・市場依存率の上昇＝プロレタリアートへの転化、さらに地域的に集中した共通の労働・景気変動の体験が、地域的アイデンティティの凝集点として地方都市を浮上させつつ、資本主義的な労働者階級を結晶させたという¹⁷⁾。19世紀初頭に至る社会的抵抗運動の鮮明な地域色——例えば、ヨークシャーの工場法要求、ランカシャーの反救貧法闘争、バーミンガムの通貨改革要求——も、地域的な経済特質の違いの反映に他ならなかった。④では16-19世紀を通じ早婚・高婚姻率と高出生率を梃子として人口増加を説くリグリー＝スコフィールドの見解が問題とされ、地域・業種・社会階層の格差を踏まえた再検討の必要が力説される。

結論は明快で、以上の4点に集約される理論装置の組み替えを通じ、「マクロ(国民経済)計算のフレームワークから離れ、地域・局地レベルの新たな成果に基づいて経済社会変化の国民的像を再構成する」(op. cit., 37)ことで「産業革命」概念が機能回復される日も遠くないと展望される¹⁸⁾。

17) 中世後期～18世紀シュタイアーマルク地方の鉄工業を対象としたO. ピックルの論考は、フロイデンベルガーの提唱になる「社会的習得」概念を援用し、特に農民副業として営まれる薪炭・食料供給の専門化、家父長制の弛緩、及び鉱山・冶金場の生活・労働規律の浸透も照射しつつ、地域全体の社会経済的な変容過程を克明に追究して、その方向の代表例を提供する(Pickl 1986)。

18) より理論的な仕方ではあれ、類似の見解はオーストリア人のF. バルツアレックからも提示されている(Baltzarek 1979)。彼は地域経済を、先進地域、追従地域、後進地域の3類型に整理し、工業化の鍵ポジションに先進地域を据える。この先進地域には、域外市場向の手工業地域、鉱山・金属加工業の隣接・併存地域、及び一大消費拠点として生産、

む す び

「プロト工業化」論は、1982年第8回国際経済史会議における主要テーマ選定をハイライトとしつつ、過去四半世紀間国際的に活発な議論を呼んできた。本論では、研究史上画期となった82年以降の欧米学界の主要な研究業績をもとに、その後の「プロト工業化」論争の行方を追跡した。ただ、文献検索は網羅的でなく、取り上げた論点は膨大な数に上る争点から見れば、氷山の一角をなすに過ぎない。その意味から、本論は大雑把な鳥瞰図の域を一步も出るものではない。しかし、成長史学版かネオ・マルキスト版に関わりなく、テーゼの基調をなす単線的発展論は、理論・実証両面からの批判を通じて既に退けられている。換言すれば、労働大衆の目を通して、地域社会経済・制度・文化の変容をキメ細かに追究し、「工業化」の意味を問い直す方向を鮮明に打ち出している。最後に「手工業地域」を表題に掲げた理由に収斂させつつ、本論の成果を簡単に要約し、併せて「地域史」としての意義と限界を、より大きな分析単位の国民経済や世界システムとの関係と絡めて一言することで結びに代えたい。

Iでは、メンデルスとドイツのネオ・マルキスト三人組とに代表されるテーゼ派の理論的概要の紹介から始め、テーゼ派の単線的発展論批判を軸に最近の成果を紹介した。①「工業化の

挫折」発生の高い頻度、②生産諸力の発展の象徴である農工分離への一方的傾斜でなく、農業への資金投下の積極的意味の照射、③プロト工業従事者＝農民家族のプロレタリアート化からの反転も含む紆余曲折、④プロト工業の生産組織として問屋制度以外の多様な形態の併存、⑤土地から遊離した稼得機会導入に伴う早婚・多産・高婚姻率社会への移行に還元できない、家族経済・人口動態の可逆的で多方向的な変化の検証、⑥都市・農村の概念峻別の困難、農村への生産立地転換の原因と理解されてきたギルドの担う柔軟で積極的役割の評価、それを踏まえたシステム・ネットワーク論を駆使した地域的接近、の諸点においてそうである。

IIでは、この根底的な批判のなか研究がかえって活性化している、その学説的な背景を次の3点に整理し、それを通じて「手工業地域」論浮上の理由を明らかにした。①これまで産業史、農業史、商業史、制度史、社会史、人口史として個々別々に行われてきた研究を、地域レベルの「全体史」に収斂させつつ再構成する際の道具建てとしての活用、②広範な分野に跨がる複合モデルから特定テーマを選びだし、テーゼの批判的検討も睨んだ「部分モデル」としての継承・発展、③都市・農村、域内・域外市場、複合産業、多様な経営形態を包括する「手工業地域」として継承し、それぞれの社会経済的個性も析出しながら、地域的な変容と地域の相互依存の深まりのなか「工業化」への歩みを労働大衆の目を通して再構成する方向。そこから浮上してくる「工業化」は、地縁的・職業的に様々な次元で濃密な人間関係とそれぞれの地域に特有な制度・文化とに支えられ、そうした「社会価値・非市場的価値」と不可分に絡み合いながら初めて展開する経済社会の像に他ならない。

、拡大の促進者で生産・流通の調整者でもある首都・居城都市地域が含まれ、そこで蓄積された資本・技術・法制度の他地域への伝播により、特に次のメカニズムにより国民経済の凝集が進む。先進地域の社会経済諸力を牽引力としたプロト工業化の展開、それらの地域統合を推進する国民国家の形成、その経済政策による資本主義の一層の発展。このような社会経済的発展の連続こそが、ヨーロッパの工業化の一大特質をなしているというのである。

別言すれば、工業化は、勤勉・節約・合理性のプロテスタンティズムの宗教倫理に裏打ちされた、「経済人」による自信に満ちた営為の一つの到達点というよりは、むしろ「社会に埋め込まれた経済」の離床運動に直面し戸惑い反発しつつも、総力を挙げて対応した生産者が、各自の意識を越え独自の論理で展開する生産力体系の、その軍門に降るまでの足跡として、捉え直されることになる。

従って、「手工業地域」の分析に当たり、あらかじめ、特定の国民経済類型を押し上げる、純粹培養的な進化の舞台として、あるいは世界システムを構成する「中核・半周辺・周辺」地域の基本特質を備えた典型例として取り上げる姿勢は、もはや受容できない（田北 1995）。他方、初めから地域史に視野を限定し、比較地域史に終始することも許されない。既述のように、単線的発展論批判のなかモデル外生＝域外要因の重要性が照射され、「手工業地域」の自己完結性が批判に曝されており、またネオ・マルキスト版テーゼは、初めからブレンナー流の農民的世界とウォーラステイン流の世界経済の連結を狙いに掲げていたからである。この要請に応

える一つの方法が、システム・ネットワーク論の援用による地域内外諸力の交差的作用と国家の経済政策による舵取りとのもとに進む、「手工業地域」の変容と工業化の追跡である¹⁹⁾。その際、平板な階級関係には解消できない、労働大衆の生活世界に視点が置かれることは言うまでもない（坂巻 1994、が優れたモデルケースを提示する）。

わが国に馴染みの深いイギリス労働社会史の大家、故 E.P. トムスン教授は「我々自身、社会進化の終点には立っていない」（引用は、Berg 1985, 88）と述べ、社会経済の連続的な進化という暗黙の前提に立って過去の事象を回顧的に裁断する姿勢に強く警鐘を鳴らしたが、その言葉を座右の銘に据える限り、ミクロからマクロまで包括した複合モデルのプロト工業化論は、まだ魅力を失っていない。とりわけ、地域の技術・制度・慣習・文化と調和を図りながら「工業化」と格闘した労働大衆の生活の足跡を照射することで、成長史学の当初の意図とは正反対の方向から、ヨーロッパの歴史的経験を第三世界の工業化のための一つの処方箋とする視角も浮上させてきているからである。

参考文献

- 19) 工業化研究の分析単位として地域が前景に押し出されるなかで、国家の政策的舵取りの意義は、全体に低く評価されてきた（Pollard 1991, 37-41；Kaufhold 1986, 186-93；例外として、Baltzarek 1979）。その分、それぞれの地域を取り巻く周辺世界との自由闊達な分業関係の展開が強調されるようになった。イギリス重商主義体制下のアイルランド麻織物工業のフランス・スコットランドとの自在な経済関係や、対プロイセン戦役によるシュレージェン割譲後に導入された禁輸措置下に存続する、ボヘミア麻織物・ガラス工業との緊密な関係を、その代表例とする（Collins 1982；Cohen 1990；Klima 1989；未刊ながら、九州大学大学院経済学研究科博士課程後期1年の碓井仁氏の1994年度の修士論文「中部ヨーロッパにおける工業化の初期過程——ボヘミア地方の事例を中心に」も参照）。この時期ヨーロッパで顕著となる国民国家の凝集化とも絡めて、再検討の余地があらう。
- Berg, M., 1985, *The Age of Manufactures. Industry, Innovation and Work in Britain 1700-1820*. Oxford.
- Berg, M. (ed.) 1991a, *Market and Manufacture in Early Industrial Europe*. London/New York.
- Berg, M., 1991b, Markets, Trade and European Manufacture. in : Berg 1991a, p. 2-28.
- Berg, M./Hudson, P., 1992, Rehabilitating the Industrial Revolution. in : *Economic History Review*, 45-1, p. 24-50.
- Berg, M./Hudson, P./Sonenscher, M. (ed.), 1983, *Manufacture in Town and Country before the Factory*. Cambridge/London/New York.
- Baltzarek, F., 1979, Zu den regionalen Ansätzen der

- frühen Industrialisierung in Europa mit Überlegungen zum Stellenwert der frühen Industrialisierung im Habsburgerstaat des 18. und 19. Jahrhunderts. in : Knittler, H. (hrsg.), *Wirtschafts- und sozialhistorische Beiträge*. Wien. S. 334-55.
- Brenner, R., 1977, The Origin of Capitalist Development ; A Critique of Neo-Smithian Marxist. in : *New Left Review*, 104, p. 25-92.
- Bull, A. C., 1989, Proto-industrialization, Small-Scale Capital Accumulation and Diffused Entrepreneurship. The Case of the Brianza in Lombardy 1860-1950. in : *Social History*, 14, p. 177-200.
- Clarkson, L. A., 1985, *Proto-Industrialization : The First Phase of Industrialization?* London (鈴木健夫訳 1993.『プロト工業化－工業化の第一局面?』早稲田大学出版部)
- Cohen, M., 1990, Peasant Differentiation and Proto-Industrialization in the Ulster Countryside ; Tullylish 1690-1825. in : *Journal of Peasant Studies*, 17, p. 414-32.
- Coleman, D. C., 1983, Proto-Industrialization ; A Concept Too Many. in : *Economic History Review*, 36, p. 435-48.
- Collins, B., 1982, Proto-Industrialization and Pre-Famine Emigration. in : *Social History*, 7, p. 127-46.
- Eley, G., 1984, The Social History of Industrialization ; Proto-Industry and the Origin of Capitalism. in : *Economy and Society*, 13-4, p. 519-39.
- Eley, G., 1986, Rejoinder to Perlin's "Scrutinizing which moment?". in : *Economy and Society*, 15-2, p. 281-3.
- Gerteis, K., 1986, *Die deutsche Städte in der frühen Neuzeit*. Darmstadt.
- Gorisser, S./Wagner, G., 1986, Protoindustrialisierung in Berg und Mark ? Ein interregionaler Vergleich am Beispiel des neuzeitlichen Eisengewerbes. in : *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins*, 92, S. 163-71.
- Gutmann, M., 1987, Protoindustrialization and Marriage Ages in Eastern Belgium. in : *Annales de démographie historique*, p. 143-73.
- Gutmann, M. P./Loboutte, R., 1984, Rethinking Proto-industrialization and the Family. in : *Journal of Interdisciplinary History*, 14, p. 587-607.
- Hader-Gersdorf, E., 1986, Leinen Regionen im Vorfeld und im Verlauf der Industrialisierung 1780-1914. in : Pohl, 1986, S. 203-37.
- Hohenberg, P. M., 1991, Urban Manufacture in the Proto-industrial Economy ; Culture versus Commerce ? in : Berg, 1991a, p. 159-71.
- Hohenberg, P. M./Lees, L. H., 1985, *The Making of Urban Europe 1000-1950*. Cambridge/London.
- Houston, R./Snell, K., 1984, Proto-industrialization ? Cottage Industry, Social Change and the Industrial Revolution. in : *Historical Journal*, 27, p. 473-92.
- Hudson, P., 1983, From Manor to Mill : West Riding in Transition. in : Berg/Hudson/Sonenscher, p. 124-146 (篠塚義信訳「マナーからミルへ——移行期のウェストライディング」篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編, 1991年, p.65-94).
- Hudson, P., 1984, *The Genesis of Industrial Capital ; A Study of the West Riding Woll Textile Industry c. 1750-1850*. Cambridge/New York/Melbourne.
- Kaufhold, K. H., 1984, Handwerksgeschichtliche Forschung in der Bundesrepublik Deutschland. Überlegungen zur Entwicklung und zum Stande. in : Engelhardt, U. (hrsg.). *Handwerker in der Industrialisierung*, Stuttgart, S. 20-33.
- Kaufhold, K. H., 1986, Gewerbelandschaften in der frühen Neuzeit 1650-1800. in : Pohl, 1986, S. 112-202.
- Kisch, H., 1989, *From Domestic Manufacture to Industrial Revolution. The Case of the Rhineland Textile Districts*. New York/Oxford.
- Klima, A., 1989, Domestic Industry, Manufactory and Early Industrialization in Bohemia. in : *The Journal of European Economic History*, 18-3, p. 509-527.
- Komlos, J., 1989, *Nutrition and Economic Development in the Eighteenth-Century Habsburg Monarchy*. Oxford.
- Kriedte, P., 1982 Die Stadt im Prozeß der europäischen Proto-Industrialisierung, in : *Die alte Stadt*, 9, S. 19-51.
- Kriedte, P., 1986, Demographic and Economic Rhythms ; the Rise of the Silk Industry in Krefeld in the Eighteenth Century. in : *The Journal of European Economic History*, 15-2, p. 259-89.
- Kriedte, P., 1991, *Eine Stadt am seiden Faden*. Göttingen.
- Kriedte, P./Medick, H./Schlumbohm, J., 1977a, *Industrialisierung vor der Industrialisierung*. Göttingen.
- Kriedte, P./Medick, H./Schlumbohm, J., 1977b, Einleitung zu 1977a, S. 13-33.
- Kriedte, P./Medick, H./Schlumbohm, J., 1983, Die Proto-Industrialisierung auf dem Prüfstand der historischen Zunft. Antwort auf einige Kritiker. in : *Geschichte und Gesellschaft*, 9, S. 87-106.
- Kriedte, P./Medick, H./Schlumbohm, J., 1992, Sozial-

- geschichte in der Erweiterung-Proto-Industrialisierung in der Verengung? Demographie, Sozialstruktur, moderne Hausindustrie; eine Zwischenbilanz der Proto-Industrialisierungs-Forschung. in: *Geschichte und Gesellschaft*, 18, S. 70-87, 231-55.
- Lehning, J. R., 1983, Nuptiality and Rural Industry; Families and Labor in the French Countryside. in: *Journal of Family History*, 8, p. 333-45.
- Levine, D., 1977, *Family Formation in an Age of Nascent Capitalism*. New York/San Francisco.
- Levine, D., 1984, Production, Reproduction, and the Proletarian Family in England 1500-1851. in: Id. (ed.), *Proletarianization and Family History*. Orland, p. 87-127.
- Mager, W., 1988, Protoindustrialisierung und Protoindustrie. Vom Nutzen und Nachteil zweier Konzepte. in: *Geschichte und Gesellschaft*, 14, S. 275-303.
- Mattmüller, M., 1983, Die Landwirtschaft der schweizerischen Heimarbeiter im 18. Jahrhundert. in: *Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie*, 31, S. 41-56.
- Mendels, F., 1972, Proto-Industrialization; The First Phase of the Industrialization Process. in: *Journal of Economic History*, 32, p. 241-61 (石坂昭雄訳「プロト工業化—工業化の第一局面」篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編, 1991, p. 1-28).
- Mendels, F., 1982, Proto-Industrialization: Theory and Reality. in: *Eighth International Economic Congress. A Themes*. Budapest, p. 69-110 (田北廣道訳「プロト工業化: 理論と現実」『商学論叢』32-1, 1987, p. 95-128).
- Perlin, F., 1983, Proto-Industrialization and Pre-Colonial South Asia. in: *Past and Present*, 98, p. 30-95.
- Perlin, F., 1985, Scrutinizing Which Moment? A Comment on G. Eley, "The Social History of Industrialization (1984)". in: *Economy and Society*, 14-3, p. 374-98.
- Petmazas, S. D., 1990, Patterns of Protoindustrialization in the Ottoman Empire. The Case of Eastern Thessaly c. 1750-1860. in: *The Journal of European Economic History*, 19, p. 575-604.
- Pfister, U., 1989, Proto-industrialization and Demographic Change; The Canton of Zurich Revisited. in: *The Journal of European Economic History*, 18-3, p. 629-62.
- Pfister, U., 1992, The Protoindustrial Household Economy; Toward A Formal Analysis. in: *Journal of Family History*, 17-2, p. 201-232.
- Pickl, O., 1986, Die Steiermark als Gewerbe- und Industrielandschaft vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Zur Entstehung moderner Industrie-reviere in alten Fortschrittsregionen. in: Pohl, 1986, S. 16-38.
- Pohl, H. (hrsg.), 1986, *Gewerbe- und Industrielandschaften vom Spätmittelalter bis ins 20. Jahrhundert*. Stuttgart.
- Pollard, S., 1991, Regional Markets and National Development. in: Berg, 1991a, p. 29-56.
- Poni, C., 1985, Proto-Industrialization, Rural and Urban. in: *Review*, 9, p. 305-14.
- Quataert, J. A., 1988, A New View of Industrialization, Protoindustry or the Role of Small-Scale, Labor-Intensive Manufacture in the Capitalist Environment, in: *International Labor and Working Class History*, 33, p. 3-22.
- Reininghaus, W., 1989, *Zünfte, Städte und Staat in der Grafschaft Mark. Einleitung und Regesten von Texten des 14. bis 19. Jahrhunderts*. Münster.
- Reininghaus, W., 1990, *Gewerbe in der frühen Neuzeit. (Enzyklopädie deutscher Geschichte. Bd.3)*, Oldenburg.
- Schlumbohm, J., 1992, Familie, Verwandtschaft und soziale Ungleichheit; Der Wandel einer ländlichen Gesellschaft vom 17. zum 19. Jahrhundert. in: Vierhaus, R. (hrsg.), *Frühe Neuzeit-Frühe Moderne?* Göttingen, S. 133-56.
- Schrank, G., 1992, Crossroad of the North; Proto-Industrialization in the Orkney Islands 1730-1840. in: *The Journal of European Economic History*, 21, p. 365-88.
- Schultz, H., 1981, Handwerk, Verlag, Manufaktur in den deutschen Territorien während des 17. und 18. Jahrhunderts. in: Fritze, K./Müller-Mertens, E./Schildhauer, J. (hrsg.), *Zins-Profit-Ursprüngliche Akkumulation*. Weimar, S. 199-209.
- Schultz, H., 1983a, Protoindustrialisierung und Übergangsepoche vom Feudalismus zum Kapitalismus. in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 31, S. 1079-91. (田北廣道訳「プロト工業化と封建制から資本主義への移行」『商学論叢』32-2, 1987, p. 163-180).
- Schultz, H., 1983b, Handwerkerrecht und Zünfte auf dem Lande im Spätfudalismus. in: *Jahrbuch für Geschichte des Feudalismus*, 7, S. 326-50.
- Schultz, H., 1984, *Landhandwerk im Übergang vom Feudalismus zum Kapitalismus*. Berlin.
- Stromer, W., 1986, Gewerbereviere und Protoindustrie in Spätmittelalter und Frühneuzeit. in: Pohl,

- 1986, S. 39-111.
- Sundin, J., 1989, Family Building in Paternalistic Proto-Industries ; A Cohort Study from 19th Century Swedish Iron Foundries. in : *Journal of Family History*, 14, p. 265-89.
- Swanson, H., 1988, The Illusion of Economic Structure ; Craft Guilds in Late Medieval English Towns. in : *Past and Present*, 121, p. 29-48.
- Takita, H., 1994, Wirtschaftliche Stadt-Umland-Beziehungen des Kölner Raums im Spätmittelalter. in : Verhulst, A./Morimoto, Y. (hrsg.), *Landwirtschaft und Stadtwirtschaft im Mittelalter*. Gent/Fukuoka, S. 185-224.
- Tilly, R., 1989, Prologue and Epilogue to Kisch 1989, p. 3-12, 219-29.
- Tilly, Ch./Tilly, R., 1971, Agenda for European Economic History in the 1970's. in : *The Journal of Economic History*, 31, p. 184-98.
- Tilly, Ch./Tilly, L./R. Tilly, 1991, European Economic and Social History in the 1990's. in : *The Journal of European Economic History*, 20-3, p. 645-71.
- de Vries, J., 1984, *European Urbanization 1500-1800*. Cambridge/Massachusetts.
- Van der Wee, H., 1988, Industrial Dynamics and the Process of Urbanization and De-Urbanization in the Low Countries from the late Middle Ages to the 18th Century. in : id. (ed.), *The Rise and Decline of Urban Industries in Italy and in the Low Countries*. Leuven, p. 307-81.
- 石坂昭雄 1992, 「地域世界の経済史——ヨーロッパ経済」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望(学会創立60周年記念)』, p.35-46.
- 石坂昭雄 1995, 「地域・農村工業・工業化。近代西ヨーロッパ農村工業史研究の現状と課題」(社会経済史学会第63回全国大会, パネルディスカッション2用ペーパー)。
- 今井けい 1993, 「女性史研究の動向(イギリスを中心として)」『社会経済史学』58-6, p.80-109.
- I. ウォーラスティン(藤瀬浩司他訳) 1987, 『資本主義世界経済Ⅰ, Ⅱ』名古屋大学出版会。
- 斎藤 修 1985, 『プロト工業化の時代。西欧と日本の比較史』日本評論社。
- 酒田利夫 1994, 『イギリス都市史』三嶺書房。
- 坂巻 清 1994, 『産業革命期ヨークシャー紡毛工業におけるクロス・ホール制と小織元の慣習』『研究年報「経済学」(東北大学)』56-2, p.203-223。
- 佐藤彰一 1991, 「メロヴィング期ベリイ地方における空間組織——古代的都市・農村関係の存続と展開」『名古屋大学文学部研究論集』107, p.69-86。
- 高木正道 1990, 『ヨーロッパ初期近代の諸相——経済史と心性史のあいだ』梓出版社。
- 田北廣道 1986, 「1960年以降西ドイツ学界における中世後期の都市・農村関係に関する研究」(上)(中)(下)『商学論叢』31-1, p.113-54; 同誌 32-1, p.59-93; 同誌 32-3, p.131-62。
- 田北廣道 1987a, 「西欧中・近世ツンフト・手工業史に関する研究動向——西ドイツ学界を中心に」『商学論叢』31-3・4, p.399-434。
- 田北廣道 1987b, 「ドイツ学界におけるプロト工業化研究の現状(1)——東ドイツ学界の場合」『商学論叢』32-2, p.133-62。
- 田北廣道 1987c, 「中世都市史の研究手法としての中心地論の意義と限界——ドイツ学界を中心に」『商学論叢』32-3, p.35-67。
- 田北廣道 1992, 「14-15世紀西欧における都市と農村——近代都市システムの起点形成」『経済学研究』57-5・6, p.263-76。
- 田北廣道 1993a, 「統合下の東ドイツ経済史学の動向」九州大学ドイツ経済研究会編『統合ドイツの経済的諸問題』, p.151-77。
- 田北廣道 1993b, 「前工業化社会から工業化社会へ」武野要子編『商学史概論』有斐閣, p.54-71。
- 田北廣道 1994, 「世界システム論の史的可能性——先資本主義システム研究の進展を受けて」細江守紀・濱砂敬郎編『現代経済の革新と展望』九大出版会, p.239-64。
- 田北廣道 1995, 「近代世界システム形成期の産業構造調整——ライン地方の中心地システムを例として」九州大学国際経済構造研究会編『経済・経営構造の国際比較試論』九大出版会, p.283-304。
- 丹下 栄 1992, 「流通特権文書にみるカロリング期交易の諸相。ひとつの素描」『下関市立大学論集』35-2・3, p.167-191。
- 二宮宏之 1984, 「西欧のプロト工業化」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望(学会創立50周年記念)』, p.35-46。
- 馬場 哲 1993, 『ドイツ農村工業史——プロト工業化・地域・世界市場』東京大学出版会。
- 平井 進 1994, 「19世紀前半北西ドイツの農民・ホイアーリング関係——東ヴェストファーレンを中心に」『社会経済史学』60-4, p.33-66。
- F. メンデルス/R. ブラウン他著 1991, (篠塚義信・石坂昭雄・安元稔編訳)『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会。
- 森本芳樹 1988, 「9世紀西欧農村の都市形成力に関する考察——プリュム修道院領明細帳を主たる素材として」森本芳樹編著『西欧中世における都市・農村関係の研究』九大出版会, p.91-145。